

令和3年度

喜多方市小学校農業科作文コンクール

作品集



喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 大場 健哉

喜多方市小学校農業科は今年度で十五年目を迎えました。この節目の年に、本市農業科の取組に対して、東北農政局会津北部農業水利事業建設所様の推薦をいただき、農林水産省による「ディスプレイ農山漁村（むら）の宝アワード」（第八回選定）において選定団体（奨励賞）となりました。選定数は全国で三十八のうち、教育委員会の選定は本市のみでありました。この受賞は、本市農業科の確かな取組が評価されたものであります。十五年という長きにわたり、市小学校農業科を支えてくださった農業科支援員の皆様をはじめ、関東学院大学 教授 佐藤幸也様、会津農林事務所様、会津よつば農業協同組合様、県立耶麻農業高等学校様等々、多くの関係機関の皆様のご支援とご協力をいただきましたことに対して心から感謝申し上げます。

さて、本年度も、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、市内全小学校十七校、千四百四十二名の児童が「豊かな心の育成」「社会性の育成」「主体性の育成」という三つのねらいの達成に向けた取組を行い、作文にまとめることができました。その中から各学校の推薦を受け、審査会において大賞五名、優秀賞十名、農業科賞三十名が決定いたしました。

ある児童は、これまでの六年間の農業科体験を振り返り、農業に関心がなかった自分が、六年間の体験により「食とは農業である」とわかったこと、世界の飢餓に苦しむ姿を見て農業の重要さに気付いたこと、そして、農

業に興味を持ち始めたことをまとめていました。一つ一つの体験は小さなものでありますが、六年間という醸成期間が新たな気付きや学びを生み出したと感じました。また、ある児童は、地域の協力を得ながら、自分たちで育てた農作物を生かした商品づくりに挑戦するなかで感じた喜多方の活性化について作文をまとめました。各学校がそれぞれの特色を生かし、少しずつ新たな農業科を創っていることは大きな喜びです。紹介したい素晴らしい内容は他にもございますが、ぜひ、本冊子をお読みいただきたいと存じます。紙面の都合上、入賞した四十五点の作品のみを掲載いたしますが、農業科作文コンクールに取り組んだ全ての児童にありがとうという感謝の気持ちを伝えたいと思います。

結びに、ご多用の中ご寄稿いただきました関東学院大学教授の佐藤幸也先生始め、研究会での貴重なご意見をいただくとともに、審査においても慎重に審査していただきました審査員の皆様にも感謝申し上げます。今後もこれまで同様のご支援とご協力を賜りますようお願いいたしまして、作品集発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。



「教育ファームと小学校農業科（人間らしく生きる農の教育力）」

関東学院大学理工学部 教授 佐藤 幸也



1 心の回復や生きる力を育む農の暮しや教育ファーム

キリスト教の世界である欧州では、昔から戦争や事故、病気などで親が亡くなり、家族と住めなくなった子どもたちが、教会に引き取られることがよくありました。そこで読み書きや一人で生活していくために必要な仕事の基礎を身に着けました。仲間と一緒に山羊や牛を育て、ミルクを搾り、畑で麦や豆、野菜などを育てたのです。いすや机、農具作りの他、女子は裁縫や料理なども学び、将来大人になり、家族や地域の人と仲良く暮らすための作法や知恵も身に着けました。植物（作物）や動物の世話による学びは、悲しみを背負っている子どもたちの心をいやし、なぐさめました。そして、神父、牧師さんや仲間とともによりよく生きる力を身に着けました。教育ファームです。

だいにじせかいたいせんせんご
第二次世界大戦前後の日本でも、盛んに農業教育が行われました。大正自由教育期は、総合的・合科的学習が
はじまり、「教育県」と呼ばれる長野では飼育や田んぼや畑の学習が発展し、今も行われています。第二次世界
大戦後も中学校には農業という科目がありました。農協や県の専門家などが先生と協力して教えたので、農家
にとって大切な学習でした。今でも筑波大学はじめ大学附属の小中高校、有名私立小学校などでも行われていま
す。そして、校外学習の場として、喜多方市にそれらの学校の児童生徒がたくさん来ていました。

でも、ここで注目したいのは、第二次世界大戦後の米国です。日本や中国でもたくさんの方が戦争の犠牲にな
りましたが、米国でも多くの子どもたちが親を失い、心の病になりました。その子どもたちをなぐさめ、傷つ
いた心を回復するために作られたのが教育ファームです。中世から近世の教会でなされていたことが、米国でよ
みがえったのです。農の学習には学力・人間形成と医療、福祉などの力があるので、世界に広がっています。

2 欧米、カナダなどの総合学習や社会教育と教育ファーム

欧米などでは教育ファームが大切な役割を果たしてきました。人々は、長いバカンスや土日の週末をファーム
で過ごします。畑の作業や動物との触れ合いなどで家族や友人と生きる喜びを確かめるのです。幼稚園や小中学
生なども理科や社会科、国語などの学習をファームと連携して行います。心の教育も含めて教科という科学、芸術

などの学習も行い、キャンプや環境保全活動（教育）も重視されています。そのため、宿泊しながら乳牛や羊などを飼育し、チーズ・バターづくり、調理などができる施設があります。イギリスのナショナルカリキュラムでは、農場と教室の学びが連携しており、ロンドンには約百もの教育（シテイ）ファームがあります。

3 教育ファームから医療、福祉の場へ

近年、作物や花木栽培や動物の世話をするとけがや病気の回復が早くなり、良い効果があるとわかってきました。緊急時や重篤な場合は手術や薬が必要ですが、人間の持つ自然の治癒力・回復力（レジリエンス）を農作業などが引き出すと注目され、正式の医療行為になっています。セラピーという言葉方もします。実は、東日本大震災後、仮設住宅や避難所で畑を作ったところ、人々が集まってきました。そして、ようやく笑顔を取り戻し、助け合うコミュニティ作りができました。農は人々を結び付け、助け合いながら共に生きる力を培うのです。皆さんが農業科で学ぶことには、こんな意味もあるのです。そして、みんなで水やりや雑草取りをしながら大根に「大きくなあれ」と声をかけている時、自分も一緒に大きくなっています。その姿に家族や先生方、支援員さんたち、喜多方の人たちが笑顔になります。それは世界の友達とつながる科学と心の学習です。最高のSDGsです。みんなで一緒に宝物を作る学習が「小学校農業科」なのです。作文にはそれがあふれています。

入
賞
作
品

目次

【大賞】

がんばって育てたアズキとダイズ

豊川小学校 三年 坂内 萌々華

12

農業科は、心をつくる

松山小学校 五年 猪俣 愛佳

15

新たな挑戦

第一小学校 六年 渡部 結斗

16

メロンを育てて学んだこと

駒形小学校 四年 小林 穂乃花

13

農業の大切さ

慶徳小学校 五年 佐藤 由叶

14

【農業科賞】

はじめて育てたよ	加納小学校	三年	沢井 夢那	27
ありがとう	塩川小学校	三年	五十嵐 あかり	28
はじめての農業科	第三小学校	三年	富山 孝樹	29
昔の人の米作りをしてみたら	堂島小学校	三年	五十嵐 花笑	30
エダマメとダイズのしゅうかく	松山小学校	三年	加藤 心美	31
サツマイモを育てたよ	山都小学校	三年	折笠 蓮月	32
高畑文男さんとみんなで作ったエダマメ	姥堂小学校	四年	村岡 莉央奈	33

ぐんぐん育て	第一小学校	四年	二本松 大輝	34
ジャガイモを育てたら・・・	豊川小学校	四年	内海 結愛	35
農業科から学んだこと	熱塩小学校	五年	峯岸 叶	36
農業が教えてくれたこと	熊倉小学校	五年	遠藤 蒼	37
米を作る苦勞	熊倉小学校	五年	武藤 初	38
米づくりを学習して	塩川小学校	五年	高橋 柚杏	39
一から育てて	塩川小学校	五年	佐藤 あかり	40
自分たちの手で	関柴小学校	五年	佐藤 希	41

農業科活動を通して考えたこと

第一小学校 五年 小林 真歩 42

がんばって育てたハクサイ

高郷小学校 五年 齋藤 翼 43

おいしく育てたネギ

高郷小学校 五年 須藤 珀 44

米作りで学んだこと

堂島小学校 五年 高久 想乃子 45

米作りで感じたこと

堂島小学校 五年 佐藤 蓮 46

アオマメとラッカセイが育つまで

松山小学校 五年 下妻 倅翔 47

いただきますにこめられた意味

姥堂小学校 六年 渡部 天斗 48

米作りの厳しさ

駒形小学校 六年 邊見 輝來 49

育て、ダイズ

塩川小学校 六年 山口 詩乃 50

大切な作物

関柴小学校 六年 渡部 日菜 51

農業科支援員さんとのつながり

第三小学校 六年 小林 稜空 52

人と自然と農業と

第二小学校 六年 藤井 智華 53

農業科を通して感じたこと

高郷小学校 六年 長沼 凜果 54

最後の農業科活動

豊川小学校 六年 折笠 凜 55

協力してできた農業科

山都小学校 六年 山崎 茉奈 56

編集後記

【大賞】



がんばって育てたアズキとダイズ

豊川小学校 三年 坂内 萌々華

わたしは、アズキもダイズも、今まで育てたことがありませんでした。今年はじめで育てて、たいへんなことはいったけれど、大発見もあつて、とても楽しかったです。

まず、たいへんだったことは、草むしりです。黒いポットで育てたアズキとダイズを畑にうえてから、ずっと畑の草むしりをしてきました。夏は草がなかなかぬけなくてたいへんだったけれど、わたしは、しえん員の細田さんに教えていただいたことを思い出してがんばりました。それは、「心をこめてせわをすればするほどやさいはうまく育つんだよ。」という言葉です。わたしは、やさいのおせわはわたしにしてあげなくちゃと、思うようになりました。アズキもダイズも、草むしりの後は、風が通って気持ちよさそ

うでした。

秋になって、エダマメをしゅうかくしました。ゆでて塩をふって食べようとすると、さやの中でマメが緑色にかがやいていました。いただきますと、わたしはマメにあいさつをしました。本当においしいエダマメになっていました。おせわをしてよかったです。

次に、マメの本を読んだ時、大発見がありました。実は、マメには人にているものがある……。それは、おへそ！マメにも人にも、おへそがついていたんです。人は、お母さんのおなかの中にいる時、へそのおを通じてえいようをもらいます。マメのおへそも、細いくだでさやとつながっていて、そこからえいようをもらって大きくなるのだそうです。はじめて知ってびっくりしました。マメってすごいんだなあ、と思いました。

アズキは、にてあんこにして白玉だんごにかけたり、カボチャと合わせてとうじカボチャを作ったりして食べました。アズキのえいようが、わたしにバトンタッチされた気分でした。農業科ははじめてでしたが、たいへんだけれど楽しい勉強だと思いました。

【大賞】



メロンを育てて学んだこと

駒形小学校 四年 小林 穂乃花

今年の農業科は、畑に育てる作物を学級で話し合い、メロンを育てることになりました。

わたしは、なえを植えてから、毎日水をあげに畑に行きました。今までの農業科で育ててきたミニトマトやキュウリなどの作物は毎日、水をたくさんあげ続けたらどんどん大きく育ちました。だから、私はメロンが大きく育ってほしいと思います。たくさん水をあげました。

メロンを植えてから二か月ぐらいたち、水をあげに畑に行くと、メロンのなえがかれていました。わたしは水をたくさんあげたのに、なぜかれたんだろうと思いました。そして、もう一つのメロンをかれないように大切に育てようと思いました。

それから一か月後、つゆに入りました。雨が続いた後に、畑に行きました。すると、メロンの葉が白くなっていました。それから白くなった葉がふえていき、かれてしまいました。わたしは、なぜかれたのか調べてみました。すると、最初にかれたメロンの原いんは、水のあげすぎでした。メロンはしつ度が高いことをきらい、畑に植える時は雨だけで良いことがわかりました。

二つ目のメロンは地面の土や葉にいたカビでなるうどん粉病という病気でした。名前のとおり、うどん粉をまぶしたような白色のはん点が出て、どんどん広がっていきましました。うどん粉病は、日が当たりづらかったり、水はけが悪かったりするとなりやすいと分かりました。メロンがうどん粉病になったのは、つゆで雨が続く時期でした。

わたしはメロンを育てる前にちゃんと調べればよかったと思います。調べていれば水をあげすぎたり、うどん粉病になったメロンを放っておいたりすることなく、からさずにすんだかもしれないと思います。わたしは、事前に調べることや「あれ？」と思ったことを大切にすることが大事だとわかりました。

来年の農業科も、これからの学校生活でもこの二つのことを大切にしていきたいです。

【大賞】



農業の大切さ

慶徳小学校 五年 佐藤 由叶

「みんなが農業をやらなくなったら、どうなるのだろう。」

そうなければきっと、他の国からお米や野菜などをもっと輸入しなければいけなくなります。また、国産の安全でおいしい食べものが食べられなくなったり、四季の旬の野菜を楽しめなくなったりすると思います。このように日本で農業をすること、僕たちが農業に関心を持つことは、日本にとつてとても大切なことなのだと思います。

慶徳小学校の農業科では、支えん員の方々が畑の整備をしてくださり、そのおかげでぼくたちは安心して楽しく作業を行うことができました。また、やさしくていねいに教えてくださるので、お米や野菜の育て方のコツや大切なことなどをしっかりと理解することができました。ぼくのおば

あちゃんも、支えん員をしています。おばあちゃんは家でもナスやカボチャ、キュウリなど、たくさん野菜を育てています。その姿を見て、野菜を育てるには、水や日光や養分だけでなく、心も必要なのだと感じました。ぼくが家に帰ると、おばあちゃんは毎日、畑に出ています。野菜やお米を育てるには、田んぼの様子や畑の様子を見なければならず、それはとても大変なことなのだと思います。これらのことを通して、農業というのはとても手間がかかることだと学びました。また、農家の人はとても手間がかかる仕事を毎日続けていて、とてもすごいです。農業科の学習を通して、農業とは、人を喜ばせるための大切な仕事の一つなのだと考えました。

これからはぼくたちが、農業に関心を持ち、農業を手伝ったり、農業の大切さを伝えたりして、この慶徳地区の農業を守っていかなくてはいけません。そして、地域の人に、四季の旬の食材やおいしいお米を味わってもらいたいと思います。

【大賞】



農業科は、心をつくる

松山小学校 五年 猪俣 愛佳

みなさんは、農業科をどのようなものだと考えていますか。きつとみんなで協力して野菜などを育てるというものだと思います。しかし、私の中では、育てているものを観察して新たなものを発見し、いろいろな感情をもち、また、友達と友情を深め、助け合い、協力のすばらしさを知るものです。つまり、農業科は心をつくるのです。

今年の農業科は、アオマメとラッカセイを育てました。支援員さんに種のまき方や、これからどう育つのか教えていただきました。ラッカセイは「地面の中に実がなる」という一つ新しい発見をしました。理由を、本やラッカセイを育てているおじいちゃんに聞いたりしました。すると、「土の中の方がラッカセイにとっては、安全でたくさん実

をつくることのできるのだよ。」と教えてくれました。私は、植物も自分が生きやすく、より自分を活かせられるところを選んで土の中で育っているのではないかと思いました。

次は、草むしり、水やり期間です。私はこの期間がとてもきらいです。暑いし、体力をたくさん使うからです。でも、今年作ったアオマメは福豆として全校生に配ります。新がたコロナウイルスが流行していてもみんなが一つになって、笑顔で来年は過ごして欲しいという思いから、限界までがんばりました。

最後は、いよいよ収穫です。みんなで協力して収穫しました。誰も遊んでいる人はいませんでした。みんなの心が一つになったからだと思います。

ラッカセイもこれから収穫し、調理実習に使います。また、新しい心をつくったこの農業科を体育のサッカーなど集団での学習や調理実習に活かしたいと思います。ここで終わりではありません。ここからがスタートです。みんなの笑顔のために。

【大賞】



新たな挑戦

第一小学校 六年 渡部 結斗

今年も農業科が始まった。僕は農業科が大好きだ。植物や土、生き物など、普段は関わることはないものとの関わりがあるからだ。また、実際に体を使って学べることも理由の一つだ。

「今年育てる物はラッカセイです。」
と先生は言った。僕はラッカセイについては少しくわしかつた。転校する前、四年生の時に、農業科でラッカセイを育てたからだ。「おくや」さんにお世話になることになった。育てるのは二回目のはずなのに、新しい発見ばかりだった。

ラッカセイはあまり水を必要としない。そのため、種まきと収穫が大事な作業になった。収穫の時の畑を見て、ぼ

くはびっくりした。あまりにも立派に育っていたからだ。自分たちでまいたものを収穫することは、やっぱりうれしかった。今年は、ピーナツツシヨコラを作り販売も行うことになった。信じられなかった。僕が何かを販売するときがくるなんて、今年の農業科はいつもよりすごい！

まずは、ピーナツツシヨコラの形を決めた。どのようにするかとても迷ったが、班で、

「喜多方市の形にしよう。」

というアイデアが出た。独特で素敵だと思った。僕達の班が考えたそのピーナツツシヨコラは、販売される五つの中に入ることができた。それを「月光」のチョコレート職人さんに作っていただき、ついに「おくや」と「月光」と僕たちがコラボしたピーナツツシヨコラが完成した。いよいよ、販売が始まった。最初はきんちようしたけれど、最後は大きな声で商品を紹介し、進めることができた。とても楽しかった。喜多方が好きなたちが関わって、喜多方を活性化させようとしていることに感動した。そして、僕を育ててくれた喜多方の良さをもっと知ってもらいたいと思うようになった。

【優秀賞】

おいしいポップコーンができたよ

上三宮小学校 三年 佐藤 楓

「早く植えたいなあ。」

「今年は、何あじにしようか。」

わたしたちは、五月の晴れた日に、ポップコーン用のトウモロコシを植えました。農業科しえん員の方に教えてもらいながら、ていねいに三つぶずつあなの中に入れて、土をかぶせました。わたしは、心の中で、

「ぐんぐん大きくなつて、実をつけてね。」

と思いました。その日から、朝のマラソンの時には、畑の水やりと草むしりをしに行きました。二週間くらいした時、友だちが、

「めが出てる。」

と言いました。他の友だちも、

「どれどれ、本当。」

と集まって来て見てみると、小さくてかわいいめがたくさん出ていました。それから一週間、水やりと草むしりをがんばりました。五月にいっしょに植えた野さいもつぎつぎにめを出したり、くきをぐんぐんのばしたりしました。み

んなうれしそうな顔でした。

トウモロコシは、どんどん大きくなって、二メートルをこしました。くきも、とても太く、葉は大きくなつた下がついています。暑い夏の日をすぎて、ほが茶色になったころ、しゅうかくしました。二か月くらいかんそうさせた実を一つ一つ一生けんめい取りました。かたくて、指が赤くなるほどでした。しゅうかくさいでは、三年生が心をこめてポップコーンを作りました。みんな、よろこんで食べてくれました。しおやバーベキューあじなど、どれもさい高においしかったです。

わたしは、農業科で野さい作りをけいけんして、毎日当たり前に食べていた野さいを育てることは、大へんなことだと思いました。でも、苦ろうしてあいじょうをこめて育てた分だけ、野さいもおいしく育ってくれると思いました。おいしくて、えいようたつぷりの野さいを、感しゃして食べたいと思います。

心をこめて世話を

熊倉小学校 三年 松本 佑菜

「野菜は、うえたらそのままでもいいのかな。」

と思ったことがあります。野菜をうえた後はどのような世話をするのかわかりませんでした。家に帰ったら、おばあちゃんに聞きました。

「野菜ってていねいに世話をしなくても育つの。」

と聞いたら

「ていねいにしなくても育つものはあるけど、ていねいにしたら植物が元気になるよ。野菜だったらくろうした分

だけおいしくなるよ。」

と言われて、にわにでて植物や食べ物に水くれをしてみました。すると、水をやった植物や食べ物が元気になっていくように見えました。その時「学校で育てている野菜にも、ていねいに世話をしてみよう。そうすれば、今みたいに野菜が元気になるのかな。」と思いました。

次の日、学校の畑に行つて、育てているサトイモと、エダマメとトマトとナスにていねいに水くれをしてみました。すると、学校で育てている野菜も、きのうの家の植物や食べ物のように元気になったように見えました。

夏、とてもあついい日がつづきました。「こんなにあついと野菜がかれちゃう。」と思いました。わたしは、お水をたくさんやることにしました。でも、一人では大へんなので、わたしは、友だちに言いました。

「みんな、水くれが大へんだからてつだつてくれない。」と言いました。そして、みんなでたくさん水くれをしました。すると、野菜が元気になりました。

しゅうかくした野菜は、いつも食べている野菜よりおいしかったです。くろうしたかいがありました。今までは、野菜を育てているのを見て、「かんたんだな。」と思つていたけど、やってみて、とても大へんでした。やつとおばあちゃんのくろうが分かりました。

カボチャを育てて

塩川小学校 三年 塚原 陽斗

ぼくは、はんの人といっしょに、五月から九月まで、カボチャを育てました。

カボチャを育てて思った事は、五つあります。

一つ目は、ミツバチの事です。カボチャのかんさつに行つた時に、ミツバチがせつせと花から花へととびうつっていました。きつとかふんを集めているんだと思いました。あんなに小さな体でカボチャが実るのを助けてくれるなんて、ぼくよりもすごかったです。

二つ目は、カボチャの事です。かんさつに行くたびに、カボチャがどんどん成長していくので、びっくりしました。ほかの人たちも、

「あつという間に大きくなったなあ。」

「早いなあ。」

と言っていたので、本当にびっくりしました。

三つ目は、カボチャをしゅうかくする時の事です。しゅうかくする時に、さいしょには気づかなかつたけれど、友だちが、

「あ、木の上にある！」

と言つたので、木を見たら、本当にカボチャが木の上にあつたので、びっくりしました。

四つ目は、カボチャを食べた時の事です。サラダにして食べた時に、すごくおいしかったです。家族のみんなも、「すごくおいしい！」

とよろこんでくれたので、すごくうれしかったです。

五つ目は、太陽や雨、土、虫が農業とかんけいがあると気づいた時の事です。太陽がないと光合せいできないし、雨がふらないと育たないし、土がないとえいようをとれない、虫がいないとじゅふんできない。そこが、かんけいしていると思いました。

カボチャを育てただけで、いろいろな事を学べました。太陽などが農業にかんけいある事、ミツバチがかふんをはこんでいる事などを知りました。農業でいろんな事が学べて、うれしかったです。

育てることの大切さ

慶徳小学校 四年 大竹 遥佳

「たくさんとれたね、大きいよ。」

「よく育ったね。うれしいね。」

私たち四年生は、今年、学校の畑にエダマメとニンジン
を育てました。十一月の収穫感謝祭の時に、カレーライ
スの具材として使うからです。全校生が各教室に、たて割
班ごとに分かれて、みんなで協力し作るカレーは最高です。
農業科の授業を手伝ってくださった支えん員の方々に感謝
の気持ちを込めて作るからです。

私は感謝したいことが、今年一つ増えました。それは、
ニンジンのさいばいをした時のことです。

「こんな小さい種が育つのかな。」

手にのせた種は、針のように細くて、風が吹いたら飛んで
いきそうでした。でも、それから二日に一度、水をあげて
いく間に小さなめが出たと思ったら、ギザギザした葉がど
んどん成長してきました。私は水をあげていただけなのに
ニンジンはこんなに大きく葉を広げています。その時、気
がつきました。私が二日に一度あげていたのは水と優しい
気持ちだったんです。じょうろを持ちながら、

「元気で大きく育ってね。」

「かれないでね。水をたくさん飲んでね。」

と、確かにそう話していました。

それは、人間を育てることと同じことだとわかりました。
お母さんが赤ちゃんにミルクを飲ませながら、笑顔で話す
すがたとにていることに気がつきました。

人間も野菜も、心をこめて育ててあげるから大きく成長
するんだと思います。また、人間の命と野菜の命、どちら
も大切にしなければいけないことだとわかりました。

私もニンジンのように大きく大きく、一生けん命に生き
ていきたいです。今からわくわくです。

農業の素晴らしさ

関柴小学校 四年 遠藤 ななみ

「ラッカセイかあ。三年生の時に育てたダイズよりも、かん単そうだなあ。」と、わたしはラッカセイを育てることになった時、そう思っていました。種まきもすぐに終わつたし、「これはけっこう楽なのかもしれないなあ。」と、かん単に考えていました。

ところが、朝のマラソンが終わり、畑に行ってみるのですが、ぜんぜん芽が出てきません。十日ほどで出るはずなのに、二週間たっても出てきません。「これはおかしいぞ。動物に食べられちゃったのかな。」と不安に思っていると、農業科支援員さんが、

「ハクビシンかカラスか分からないな。」

と言って、自分の家で育てたなえを植えかえてくれました。その後も、さくをはつてくれて動物から守るようにしてくれました。これは、わたしたちではできません。かん単に育てられると思っていたのに、最初からうまくいきませんでした。

実さいに育て始めると、暑い中のぼっさぼっさに生えた草むしりは、足は虫だらけになるし、チクチクするし、や

りたくないと思ったこともありました。

わたしのおじいちゃんとおばあちゃんも野菜を育てています。こんな大変な事だとは思っていませんでした。毎日、もりもり食べている野菜。いろんな人が手間をかけて、すぐくがんばって育てていることを知りました。

わたし達も農業科支援員さんが手伝ってくれて、学級のみんなと協力して、たくさん収穫できました。みんなもうれしそうでした。わたしは、この時、大変だったラッカセイを育てた達成感がいっぱいあり、「農業ってすごい。」と感じました。

家で育てた野菜、スーパーで買った野菜、すべての野菜はだれかががんばって育てた野菜です。だからこそ、大切に食べたいと思いました。

仲間を思いをせおったニンジン

豊川小学校 四年 安部 愛理

「今日はしゅうかくだ。大きくなったのかな。」

私は、手をかけた一つ一つの積み重ねがおいしいニンジンにつながっていると思ひながら世話をしてきた。今日は、その成果がわかる。

畑に入った時、いやなにおいがした。ニンジンをぬいたら、においが強くなった。何と、ニンジンがくさってしまったのだ。くきがポロポロと折れたり、溶けてやわらかくなったりしていた。私は信じられなかった。今までの世話は何だったのだろう。しかし、それでもしゅうかくを続けた。食べられそうなニンジンもときどきあった。額にあせが光った。土をほるのが大変だったが、私はすべて取りたいと思った。それは、くさっているのはあっても、みんなでがんばって育てたニンジンだからだ。

「間引きがすくなかったからかな・・・。」
小さなニンジンが集まって集合体のようになっている所を見て思った。先生は、

「しゅうかくの時期に雨が多かったこと、ニンジンがぎゅうぎゅうで水はけが悪くなってしまったことが原因か

もしれないね。」

と、話した。私も間引きのときに、「こんなにたくさんぬくの？」と思ひながらやっていた。小さいけれど、ちゃんとニンジンになっているのにかわいそうだった。これでも、間引きが足りなかったなんて・・・。私は、農家の人もこのようなつらい思いをしているのかなと思った。

しゅうかく祭では、コンソメスープとニンジンステイックを作った。中指くらいのニンジンもあったので皮をむくのが大変だった。しかし、間引きしてしまったニンジンやくさってしまったニンジンがある中で、しゅうかくできたニンジンなのだから、まな板の上でおさえながら、心をこめて、ていねいに皮をむいた。

私はゆっくり味わいながら、あつあつのスープを飲んだ。野菜のうま味が強く出ていた。ニンジンステイックも、おどろくほどニンジンの味がこかった。私は心の中で、そつとつぶやいた。

「ニンジンさん、ここまで育ててくれて、ありがとう。」

笑顔を届けたい

熱塩小学校 五年 福王寺 美夢

私の学校には、五年生と六年生が、地域の一人暮らしのおじいちゃんおばあちゃんにお赤飯を届ける「赤飯届け」という活動があります。その時に作ったお赤飯は、今までで一番おいしいと思いました。

もち米は四月に五・六年生で田んぼに肥料をまいて安全で元気な土をつくり、五月には、一年生から六年生で協力しながら一生けん命に田植えをしました。それから、苗が元気に育つための草とりを三回やり、九月に稲刈り、乾燥、脱穀をしました。

アズキは、五・六年生で種をまき、水やりや草取り、そして収穫では一粒一粒さやからとりました。もち米もアズキもみんなで一生けん命にがんばって収穫しました。

でも、毎年同じことをしているのに、なぜ、いつものお赤飯よりおいしいと感じたのでしょうか。今年は、いつもの夏より雨の日が多くて、おいしくないだろうと思っていました。でも、すごくおいしかったのです。

私は、それは、一年生から六年生までがいつもより一生けん命にがんばって育てたからだと思います。

心をこめて作ったもち米とアズキでお赤飯を作りました。お赤飯をパックにつめて、一人暮らしのおじいさんやおばあさんに届けに行きました。お赤飯を渡すときはとてもきんちようしました。

「私たちが育てたもち米とアズキで作ったお赤飯です。どうぞ、食べてください。」
と渡すと、

「ありがとう。これで長生きできるよ。また、来てね。」
と嬉しそうな笑顔を見て、私もうれしくて心がポカポカしました。

私は、「赤飯届け」のあとに食べたお赤飯がおいしかったのは、みんなが心をこめてつくったから、そして、食べた人に笑顔を届けられたからだと思いました。これからみんなを笑顔にするおいしいお米と野菜を作っていきたいです。

農業で学んだこと

第二小学校 五年 吉田 そら

私が農業で学んだことは「協力する」ということです。

四月二十三日、初めて、米の種（黄色で小指の第一関節くらい）をまきました。重ならないように気をつけました。でも、どうしても重なってしまうので、みんなと協力しながら平らに広げました。そこから観察が始まりました。観察していつて気付くことがたくさんありました。約二週間で中指くらいの大きさに成長することや、イネの葉の色がうら表でちがうことなど、たくさんおどろかされました。

米を育てているときの思い出は、田植えです。理由は、最初は土（どろ）の中に入るのがとてもいやだったけど、なれたら楽しくおいしく食べられるように、がんばろうと一番気持ちが悪化した作業だったからです。さらに、友達と一番協力できる作業なので良い経験になったなと思います。

お米（作物）を育てて感じたことは、農家さんはすごいということ。暑さや寒さに負けないところ、顔や足、手がよごれても、私達のために年中働いているところを尊敬します。私も、将来は人のため（みんなのため）にでき

ることをたくさん見つけてそれを実行したいです。

収穫祭の時に、米はおにぎりに、サトイモ、ニンジン、ネギ（育てた野菜）は、とん汁に入れておいしく食べました。とてもおいしかったので、今までみんなと協力して育ててきてよかったと思いました。

やっぱり、自分で育てた野菜を使った料理が一番おいしいなと改めて感じました。

田んぼがあるということ

加納小学校 六年 長瀬谷 広太

脱こくが終わった後の、「生き物調査」での説明の一言は、しよげき的でした。

「赤トンボはほとんどが田んぼで生まれるんだよ。」

ぼくは、農業への関心はあまりあるほうではありませんでした。でも、東京から来られた山崎さんの話を聞いて、「えっ、うそでしょ。」

と思いました。山崎さんの話によると、トンボの子どものヤゴのえさとなる生き物が、田んぼにたくさんいるということ。田んぼで赤トンボが多く生まれるのも納得しました。

「田んぼは守らないと多くの生き物が絶滅してしまうんだな。」

と思いました。

田んぼを大切にするといいことがたくさんあります。理科でも植物は二酸化炭素を吸収して、酸素を出すと学習しました。やっぱり田んぼを大切にしていきたいです。

また、最近ニュースで田んぼなどの土地がたくさんあまっています、土地があれているということもよく聞きます。それでは、いろいろな生き物がいなくなってしまうと思

ました。また、農業をやる若者がいなくて、高齢者ばかりがやっているというニュースもよく見かけます。田んぼがあること、農業をやる人がいなくなることで、この二つの問題はつながっているのです、解決しなければいけないと思いました。ぼくのおじいちゃん、おばあちゃんも農業をしているので、ぼくもたくさん手伝いたいと思いました。そして、あとつぎとしてしっかりその問題を無くしたいです。大人になっても、おじいちゃん、おばあちゃんの農業を手伝って、赤トンボがたくさんいる、みんなにとって住みよい、よりよい世界にしていきたいです。農業に関心があったぼくですが、農業科での学習を重ねるたびに、

「えっ、そうなの。」

「ぼくだったら、」

と気づいたり、考えたりしてきました。農業への関心をもたせてくださった農業科支援員の先生たちに感謝したいと思います。

田んぼがある、すてきな加納を残します。

農業についての関心

第二小学校 六年 佐藤 真希

私は、普段農業について関心もなく、あまり考えたこともなかったのが事実です。でも、二小の農業科で六年間学び、いろいろ考えたり調べたりしました。そして、毎日何気なく食べたり飲んだりしているものが、すべて農業に関わっていることを改めて知りました。私は、世界のどこかでは食料も十分でなく、飢えに苦しむ人がいることも知り、農業というものの重要さを考えさせられました。今後、農業について感謝と関心を持って、いろんなことを学んだり、考えたりしていかなければならないことも改めて感じました。

農業というお仕事は、とても大変だと思います。農業は、自然を相手にする仕事なので、人間の力ではコントロールできない部分が大きいです。夏は暑さ、冬は寒さとの戦いで、日照りの時期が続く年もあれば、台風が何度も来る年もあり、うまくいくことが少ないと思います。それによって、お米を出荷したときの値段も変わってしまうと思うし、下手をしてしまったら、農家の一年分のお米も確保できない時もあると思います。だから、とても大変だけど、農業

では天候を読むことが一番大切です。けれど、天候を操ることはできないので、天候をあらかじめ知り、栽培管理に活かすことが大切になってくると思います。大雨が降りそうなら、その対策をしなければなりません。台風だったら、非常事態です。台風の通り道、風速などを調べて、その対策をしなければなりません。収穫を早めたり、遅らせることも必要になってきます。逆に、日照りが続くと水分の補給をしなければなりません。これだけでも、農業がどれだけ大変で重要かが分かります。これからも、農業の大変さと苦勞、食料の大切さを考えながら生活していきたいです。今は他の将来の夢があるけれど、農業の仕事にも興味を持っています。

【農業科賞】

はじめて育てたよ

加納小学校 三年 沢井 夢那

わたしは、家ではあちゃんの手つだいしかしたことはありません。夕方に、ごはんの間にあうように、トマトのしゅうかくをしたり、それでサラダを作ったりしていました。

三年生になって、そう合的な学習の時間に、みんなで野さいを育てることになり、さいしよは、ちゃんと野さいを作るのかなと心ぱいでした。

みんなで協力しながら、ジャガイモのたねイモを植えました。しばらくして、みんなで見に行った時は、「すごいな。こんなに早くめがでるんだ。」

と、びっくりしました。それからは、作物が気になって、家でもばあちゃんの手つだいをいっぱいやるようになりました。

ジャガイモほりを、学校でみんなでやりました。全校生に分けるくらいのものでした。あのたねイモがこんなに大きく育っていたので、とてもうれしかったです。足、手、顔がどろんこになってイモほりをつづけました。

家にもち帰って、ポテトチップスにして食べました。お母さんは、

「おいしいいな。もっと食べたいぐらいだな。」

と言ってくれました。弟にも聞こうとしたら、手をとめないでもぐもぐ食べていました。みんなが、

「おいしい、おいしい。」

と言いながら食べていたので、わたしまで

「おいしい、おいしい。」

と、言ってしまうました。おいしくできたのは、三年生がみんなで協力して育てることができたからだと思います。

おいしい野さいを作ってくれているじいちゃんとかばあちゃんにも、感しゃしながら食べるようになりました。これからも、いろいろな作物にきょう味をもっていきたいです。

ありがとう

塩川小学校 三年 五十嵐 あかり

わたしは、カボチャを育てました。さいしよはどういうふうに育てるのだろうと思いました。

さいしよにマルチをきました。マルチとは、草を生えないようにしく物です。太陽をあびさせないようにするのです。だからマルチはとても大切なのです。さい後にわらをしいて、そのまま何日かおきます。一日目はまだだめでした。でも、五日後にはたくさんの花がさいています。

さらに一カ月後には小さなカボチャができていました。心の中で、「大きく育ってくれるかなあ。」とどきどきしていました。でも、二カ月後にはとっても大きなカボチャがあったのでびっくりしました。八月ごろにカボチャのしゅうかくに行きました。六月にはなえを植えて、こんなに早くカボチャが育ったんだなあと思いました。大きいカボチャは七センチメートルくらいありました。重さは、一キログラムくらいあって回りの長さは、四十九センチメートルもあったのでおどろきました。あんな小さなめだったのがとても大きく育ったのでうれしかったです。

お家ではカボチャグラタンを作りました。口に入れると、

ふわっとしたしょつかんであまじよっぱい味がしました。とてもおいしかったです。このカボチャは、わたしだけのカボチャなので大切に育ててよかったです。すがや先生にはいろんなことを教えてもらったおかげで、カボチャのひみつが分かりました。すがや先生が水やりや、草むしりをしてくれたから、元気に育ってくれたのだと思います。すがや先生に教えていただいた事をさんこうにして、家でもカボチャを育ててみたいです。その時は、家族に習った事を教えてあげたいです。すがや先生、カボチャの育て方を教えていただきありがとうございます。

カボチャ、元気に育ってくれてありがとう。

はじめての農業科

第三小学校 三年 富山 孝樹

ぼくは、三年生になって、はじめて農業科にさんかしました。

一番心にのこったことは、三年生だけで育てたソバです。今の四年生が、きょ年育てたソバのたねをまきました。農業科しえん員さんが、

「ソバのたねは、ばらまきというまき方でまくんだよ。」と教えてくださったので、みんなでやってみました。たねをまき終わったら、やさしく土をかけました。しえん員さんが、

「あとは、水もやらなくていい。二か月ぐらいでしゅうかくできるよ。」

と話していたけれど、「本当かな。」と思いました。でも、本当に二か月ぐらいでしゅうかくできたので、おどろきました。しかも、二か月の間、ぼくたちは草むしりも水やりも何もすることがなく、しぜんにまかせてソバは育つということをはじめて知りました。

次に心にのこったことは、サトイモです。しゅうかくまで六か月かかりました。さいしよにたねイモをうえまし

た。学年で分たんして、草むしりや水やりをしました。それに、がのよう虫がサトイモの葉っぱを食べるのでくじよもしました。どんどん葉っぱが成長して、かさになるぐらいに大きくなりました。しゅうかくする時、ぼくは「細長いイモが一こあるのかな。」と思っていたら、小さいイモがたくさんくつついていて、一りん車がいっぱいになりました。しゅうかく祭で食べたサトイモは、とってもおいしかったです。

そのほかに、しゅうかくしたハクサイは、運ぶのがたいへんでした。とれたてのネギは、中に空気がぱんぱんに入っていて、おもしろかったです。来年のしゅうかく祭は、今年い上に野菜を大きく育てて、たくさん食べたいです。

昔の人の米作りをしてみたら

堂島小学校 三年 五十嵐 花笑

わたしは、田うえやだっこくをする前は、お米は、かんに育てているんだと思っていました。

さいしよに、イネの子葉をかかさつしました。十一センチメートル位で、きれいな緑色でした。大きくなってほし
いと思いました。

次に、田うえをやりました。とってもぬるぬるしていたので、足がどろにはまってたいへんでした。だけど上手にうえられました。

それから、田んぼのじよ草でころばしを使いました。その日は、とっても暑い日でした。ころばしが重くておせなかつたので、六年生に手つだつてもらいました。そうして、田んぼのじよ草が終わりました。

六月二十五日に、田んぼに行つて、かさつをしました。長いイネや短いイネがありました。葉はつるつるしていました。さいしよにかんさつした時は、十一センチメートルだつたけれど、三十二センチメートルにまで大きくなっていてびっくりしました。はやく実がなつて、イネかりをやりたいと思いました。

九月下じゆんに、実がなつて、イネかりをすることになりました。さいしよは、六年生に手つだつてもらっていたけれど後から一人でできるようになりました。終わつてから、お米がいっぱい落ちていたので拾いました。たくさんイネをかけたのでよかったです。

十月五日に、だっこくをしました。足でふんで米つぶをとるきかいでは、**イネ**がひっかかつてとても苦労しました。でも、後から一人でできるようになってきたのでうれしくなりました。まず、米からごみをとりました。そして、米を二つに分けるきかいを使った時には、さわつてみただけでも軽い米と重い米が分かりました。わたしが思うには、風の力でごみをとつたり二つに分けたりしているんだと思いました。

お米を育てて分かったことは、こんなに手間をかけて、米を作っていることと暑い中こんなたいへんな作業をやっていることです。

これからは、米をのこさずに食べたいです。

エダマメとダイズのしゅうかく

松山小学校 三年 加藤 心美

八月の終わりに、エダマメをしゅうかくしました。しゅうかくするまで、農業科しえん員さんに、たくさんお手つだいをしてもらいました。わたしはエダマメが大すきなので、しゅうかくするのがすごく楽しかったです。

ダイズのしゅうかくも、農業科しえん員さんに手つだつてもらいました。全部で三・五キログラムのダイズをしゅうかくすることができました。ダイズのたねをまいた時には、たくさんできるかふ安でした。だから、たくさんしゅうかくできたときは、とてもうれしかったです。

わたしたち三年生は、ダイズでとうふ作りも行いました。前の日から豆を水にひたしておき、わたしたちはミキサーをかけることからはじめました。作り方は、農業科しえん員さんが、くわしくていねいに教えてくれました。はじめて知ることがたくさんありました。

ミキサーにかけて生ごをつくり、しばってできたおからも食べました。豆にゆうを、とうふのかたに入れたら、とうふができるのだと思ったら、すごくうれしくなりました。わたしたちのはんは、にがりを少し入れすぎたのか、ちよ

つとかたかったです。ほかのはんはきれいにできていたと思います。

はじめて作ったとうふは、むずかしくてちよつとしかいしたけど。でき上がるまでの大へんさを知ることができました。

こんど作るときは、いつも食べているとうふのように、ツルツルしたやわらかいとうふを作りたいです。

サツマイモを育てたよ

山都小学校 三年 折笠 蓮月

「へんな形のサツマイモだ。」

サツマイモをとった時に思いました。いつもスーパーで買って、家で見るとサツマイモはどれもだいたい同じような形をしているものばかりでした。さいしょにほった時は、太くて大きさが中ぐらいのサツマイモがとれました。つぎにほったサツマイモは本当に小さくて食べられるのか分からないほどでした。学校で育てたサツマイモはとても小さいサツマイモから自分の顔くらい大きなサツマイモまで、いろいろな形のもがとれました。

なぜ同じ場所で育てているサツマイモの形がこんなにもちがうのかぎもんに思い、調べてみました。すると土の肥沃さがかん係していることが分かりました。サツマイモは成長するとき下に向かって細くのびます。しかし、下にいけばいくほど土はかたくなるので、深いところでできたサツマイモは下にのびることができず、横に成長して、丸い形になるということが分かりました。今回の学習でサツマイモのさまざまな形がある理由について学ぶことができました。

サツマイモは一りん車三台でもはこべないほどたくさんとれました。何日かたってしゅうかくしたサツマイモを家に持って帰りました。どちらがおいしいのか気になったので、わざと大きいサツマイモと小さいサツマイモを持って帰りました。家でサツマイモのみそしるにして食べました。大きいサツマイモも小さいサツマイモもあまくてやわらかくて、とてもおいしかったです。

農業科でサツマイモを育ててみて学んだことが二つあります。一つめはいろんな形のサツマイモができる理由です。土のかたさがかん係していることが分かりました。二つ目は、大きさはあまりかん係なく、どんな形のものもおいしいということでした。

育てたときやしゅうかくするときの気持ちを忘れずに、これからもやさしいなどを食べていきたいと思えます。

高畑文男さんとみんなで作ったエダマメ

姥堂小学校 四年 村岡 莉央奈

今年の五月に、みんなでエダマメを植えました。

エダマメの種は、ダイズです。最初は、小さな種かと思つたら、大きいつぶのダイズでした。

しえん員の高畑さんには、

「最初、ポットにエダマメの種を植えて、大きくなつたら、畑に植えかえしたほうがよく育ちますよ。」

と言われたので、ポットに植えてから畑に植えかえしました。そうしたら、よく育つて、高畑先生はやっぱりすごいなと思いました。

雨の日は、エダマメの様子が見られなかったのですが、天気の良い日に様子を見ました。畑を見ると、すごくきれいに育っていてとても感動しました。その時、やっぱりみんなが協力してよかったと思いました。でも 野菜などを作るのはむずかしいんだなあと感じました。いつも畑で野菜やくだものを毎日作っている人の方がよっぽど大変なんだなと思いました。

エダマメが大きくなってから、八月ごろにしゅうかくしました。家に帰ってからすぐに食べました。そうしたら、

とてもあまくておいしかったです。家ぞくみんなも、

「あまくておいしいよ。」

と、言ってくれました。すごくうれしかったです。おうちの人に、のう業科で楽しかったことや、大変だったことをたくさん知らせました。

今年は、エダマメだけでなく、トウモロコシとニンジンも育てました。トウモロコシやニンジンは種からよく育つたのに、エダマメはポットに種を植えてから植えかえしたらよく育つたので、「どうしてかな。」と少し不思議に思いました。

今年は、エダマメ、ニンジン、トウモロコシでしたが、来年はどんな野菜を植えるのかとても楽しみです。

ぐんぐん育て

第一小学校 四年 二本松 大輝

今年の四年生は、カボチャを育てました。昨年のダイズは種でしたが、今回は、なえだったので、植え方がちがいました。水のあげ方は、キュウリなどとはちがい、週に一回、少しの水をあげるだけでした。

「カボチャは、生命力がすごく強くていいなあ。」と思いながら草むしりをしました。ぼくは虫がきらいなので、ぼくの頭の中にかんだ言葉は「やりたくない。」の一言でした。でも、カボチャだつて虫の力をかりないと生きてはいけないことに気がつきました。だから、ぼくはがんばって草をむしりました。草むしりをしていたら、小さなつぼみを見つけました。ぼくは、これから**どんな**花がさくのが楽しみになりました。

それから二週間たつて花がさきました。ぼくは、「こんなにはやく花がさくのか。成長も早いなあ。」と思いました。

次の日、葉を見てみると、うっすらと白いこなのようなものがついていました。調べてみると、それは、「うどんこ病」でした。実がくさったり、カビがはえたりするそう

です。ぼくは、「実がつくかなあ。」と心配になりました。

五十三日たつと、もう食べられるくらいの実ができていました。心配したけれど、実がついてくれてよかったです。いよいよしゅうかくです。カボチャのくきを切つて良い物と悪い物に分けました。「うどんこ病」の物の中を切つて見ると、虫やカビがありました。ぼくは、自分でよく観察してやれなかつたことを後かいました。

ぼくは、農業科の学習を通して、作物は毎日、観察することが大切だと分かりました。いつもの食事には、たくさん野菜が使われています。そこには、農家の人の努力や思いがたくさんつまっていることをわすれずに、どの野菜も残さずに食べていきたいです。

ジャガイモを育てたら・・・

豊川小学校 四年 内海 結愛

「ジャガイモの花の色は何色でしょう。」

六月十日、畑に行く前に、先生がクイズを出した。私はジャガイモの花を見たことがない。みんなは白だと予想したけれど、私はうすいむらさきではないかと思った。ドキドキしながら畑に向かった。結果は外れで、うすいピンクだった。めしべは黄色で、かわいらしい花だ。ジャガイモはあんなにごつごつしていて茶色いのに、花はこんなにも明るい印しようなのが意外だった。植物って面白い。

七月八日、私たちはまた畑に向かった。

「トマトができてる！」

だれかがさげんだ。私は友達と顔を見合わせた。トマトは植えていない。私は畑に飛びこんだ。しかし、そこには確かに、黄緑の丸いものがあった。これは、まさにトマトだ。

「ここに植えたのはジャガイモだよね？」

「トマトの種が飛んできたのかな？」

「あれ、こっちにもトマトがなっているよ。」

私達は、不思議に思いながらも、観さつカードにトマトができたことを書いた。先生は、その様子をにこにこしながら見ていた。教室にもどったら、先生が言った。

「ジャガイモを育てるとおまけでトマトもできるのかな？」

「そんな一石二鳥なわけないよ！」

「あの実が落ちて地面に入って、ジャガイモができるのかな？」

と、こうすけくんが言うと、「あー」と何人かが納得した。

「あれ、実って確か花がさいた後にできるって理科でならったよね。もしかして・・・。」

と、愛理ちゃんと言った。私もピンときた。

二週間後、畑に行くときやっぱりトマトがなっていた。しかし、色は黄緑のままだった。二年生のトマトはもう真っ赤になっている。さわってみると、とてもかたくてトマトとは全ぜんちがう感じよくだった。私は、確信した。これは、トマトではない。ジャガイモを育ててもトマトはできない。すごい発見だった。

農業科から学んだこと

熱塩小学校 五年 峯岸 叶

私は、農業科の学習でいろいろなことを学びました。

お米作りでは、田植えから稲刈りまで農業科支援員さんや地いきのみなさんに手伝ってもらいながらみんなで育てました。

五・六年生は、田植えをする前に田んぼに肥やしをまきました。田植えが終わったら田の草とりをしたり、もち米の収かくが終わったら脱こくをしたりするなど、いろいろな作業をしました。学校で赤飯を作って食べたなら、すごくおいしかったです。

五・六年生で作った感動カボチャを家に持って帰ったときは、家族が、

「あまくておいしいね。」

と言ってくれたのでうれしかったです。

私は、熱塩小学校で作ったものは、スーパーで買った野菜よりもおいしいと思っています。なぜ、こんなにおいしいのだろうかと思議に思います。

田植えでは、去年から下級生とペアになってやりました。前までは上級生とペアで教えてもらうがわでしたが、去年

からは下級生とペアで教えるがわになりました。二人で協力しながらできたのでよかったです。できたもち米で、赤飯を作り、一人ぐらしの高れい者の方々にとどけました。

みんな笑顔で、

「ありがとう、うれしいよ。」

と言ってくれたので、すごくうれしい気持ちになりました。みんなが笑顔になれるように、これから農業科の学習をがんばりたいと思います。家でもおばあちゃんたちが畑で野菜などを作っているの、その手伝いをしてみたいと思います。

農業が教えてくれたこと

熊倉小学校 五年 遠藤 蒼

「ぼくにお米を育てることなんかできるのかな。」

四月から始まった農業科での米づくり。ぼくは、家で米作りをしたことがなかったので、不安と期待が入り混じっていました。そのような中で、種まきをしました。

五月になると、育苗プールに水を張り、苗の管理をしました。早く大きくなってほしいという思いを込めながら、苗がかわいてしまわないように水やりをしました。少しずつ成長している苗を見て、田植えが待ち遠しくなりました。次に田植えをしました。田植えも初めてでしたが、山口さんや農業科支援員の方にやり方を教えていただきながら、ていねいに苗を植えていきました。

六月。ぼくは一つ大切なことに気付きました。それは、ぼく達がおいしいお米を作るために支えてくれる人がたくさんいるということです。いつ見ても田んぼがきれいなのは山口さんが暑い日も雨の日も水の管理や草かりなどをしてくださったからだだったのです。そのような山口さんの姿を想像したら、ぼくも最後まで責任を持ってお米を育てようという気持ちになりました。

そして十月。いよいよ収穫です。山口さんの今までの努力をむだにしないように集中しました。

家庭科で収穫したお米を使ってご飯を炊きました。その時のおいしさは今でも鮮明に覚えています。

農業科の米作りでは、種まき、田植え、稲刈りなど手作業で行いました。茶碗一杯のご飯が食べられるようになるまで、こんなにも手間がかけられているということに驚きました。

普段何気なく食べているご飯。これからはしっかり感謝の気持ちを込めて言いたいと思います。

「いただきます。」

米を作る苦勞

熊倉小学校 五年 武藤 初

ぼく達五年生は、米作りに挑戦しました。去年とはちがい、今年は種まきや苗の管理も自分たちで行いました。

四月。山口さんと農業科支援員の皆さんに手伝っていたきながら種まきをしました。手作業で均等に種をまくのが難しかったです。

五月には、育苗プールで苗を管理しました。みんなで協力しながら毎日欠かさずに水やりをしました。日々成長していく苗を見て、とてもうれしい気持ちになりました。

そして、田植えをしました。苗を植える目印となる条盤を友達といっしょに引きました。まっすぐに引けると思っていました。とても難しかったです。

六月から九月にかけて、山口さんに田んぼの水の管理や草刈りなどをしていただきました。そのおかげで、稲はすくすく育ち、稲刈りをするのが待ち遠しくなっていました。

そして、十月。ついに収穫する時がやってきました。鎌の使い方を教えていただき安全に気をつけながら刈り取りしました。鎌を引いた瞬間、「ざくつ。」という感覚が体に

伝わってきました。一年間でこんなに育ったのだと感動しました。

ぼくは、社会科の米作りの学習で、米ができるまでには八十八の手間がかけられているということを知りました。ぼくの家は農家なので、農作業を手伝うことがあります。しかし、どのような苦勞をして米を作っているのか意識したことがありませんでした。ぼくは、今回の農業科での米作りを通して、おいしいお米ができるまでにはたくさんの手間がかかっていることを実感しました。

学校の給食で、喜多方産の食材がたくさん使われています。農家の皆さんがたくさん手間をかけて作った食材を感謝していただきたいです。また、これからもどんどん家の農作業の手伝いをしていきたいです。

米づくりを学習して

塩川小学校 五年 高橋 柚杏

私は、五月二十八日に農業科で、田植えをしました。農業科をやるのは二回目ですが、四年生までは野菜を作っていたので少し新しかったです。

田植えから稲かりまで、四人の支援員さんにやりかたを教えてもらいました。苗植えは初めてなので、少しどきどきしました。苗を植えるところに十字線があったので、植えやすかったです。でも、田の中がドロドロで動きにくかったのも、少し苦労しました。でも、周りの人が

「いっしょにがんばろうね。」

と、言ってくれたので力がわきました。苗植えを見て最初は「楽だろうな。」と思っていたけれど、いざやってみると意外にむずかしくてとてもつかれました。苗を植えてから二週間ぐらいたったときに、また観察しました。遊ぶ時、少し見たりしていたのだけれど、二く四本植えて、とても小さかった苗が二週間でも大きくなっていました。十く十二本ぐらいまでふえていて、一番長いのは、十六く十七センチメートルぐらいの長さでした。色は、最初と変わっていませんでした。それからまた二か月ぐらいたって

観察にいきました。あまり天候がよくなかったので心配したけれど、元気に育っていました。全部の米が南側を向いていて、長さは七十五センチメートルぐらいでじゅんちゅうに育っていました。

そして、十月五日に稲かりをしました。稲をかまでかつた後、ひもで結ぶというむずかしいことをしました。友達と二人でやったけれど、すごく時間がかかりました。でも、とても楽しかったです。二人で分たんしてやりました。私は稲をかりました。

私たちは、米をつくるのは、どれだけ大へんなのかも知らずにふつうに食べていたので、少し食べものへの見方も変えたほうがいいと思いました。私たちは二人がかりで稲をかつたけれど、農家の人は一人でやっているとときもあるので、とても大へんなことをしているなと思いました。

一から育てて

塩川小学校 五年 佐藤 あかり

私は五年生の農業科で、お米を作りました。私の家は農家で、お米も作っているのですが、実際にやったことはなかったのです、とても興味がありました。

五月の二十八日、田植えをする日です。私は、どろりとした田んぼのどろの中に足をそうっと入れました。すると、「うわっ冷たい。」

「気持ち悪い。」

という声が次々とあがりました。どろは冷たくて足にまわりついてきます。でも、少し気持ちよかったです。初めてのどろにこうふんしながらも、農業科支援員の先生の話聞きながら、手の中の苗を植えていきました。苗のまわりを三〜五本ずつ、ちぎって植えます。後で使う苗はじやまなので、前の方にポーンと投げました。そこから、もくもくと作業を続けて、どのくらいいたっていきましょう。いつの間にか田んぼのはしの方まで来ていました。ふうーと息をついてから、自分の植えてきた道を見てみると、青々としたきれいな苗がずうつとならんでいます。その後、ずっと観察しに通っていると、稲がぐんぐん育ってい

るのが分かりました。

十月五日、とうとう稲かりの日です。田には、金色の稲がゆれていました。さつそくかまを持って、ざくつざくつと稲をかり、あさのひもでぎゅつと結びました。稲のたばをかるには力が必要で、とても汗をかきました。金色の稲をきれいにかり終わり、田んぼに何も無くなったころ、私はとても汗をかき、すわりこんでいました。とてもとてもつかれたけれど、初めて稲をかったのは楽しく、手ごたえがありました。こんなすごい体験ができ、うれしくて、くたびれて、明日からはんをずっと大切にできそうでした。

自分たちの手で

関柴小学校 五年 佐藤 希

「えっ、手作業なの。」

田植えは、ふつう機械でやるものだと思っていた。だけど、学校での田植えはちがっていた。機械ではやらずに手作業だ。わたしは、学校から歩いて帰るときに、時々、田んぼで作業している人を見かける。みんな機械で作業している。手作業でやるなんておどろきだった。

初めての田植え。みんなはだしで、田んぼのどろの中へどんどん入っていく。それを見ていたら、私は少し怖くなつた。だって、田んぼには虫がいる。わたしは虫が苦手だ。「大じょうぶだよ。」

友達が声をかけてくれた。入るとしだいになれてきた。手で苗を植えることは、とてもむずかしい。特に、苗を立てることに苦労した。

その後も、田植えをした田んぼが気になり昼休みの時間には、体育館のとびらからとなりの学校の田んぼをのぞき、心の中で、「もうちょっと、もうちょっと。」と応援していた。なんだか、そんなことを考えていたら昼休みも楽しく感じた。

夏の間、イネはどんどん成長していった。社会科の学習で「米づくり」を学習した。なぜ、機械を使うのか。どんな場所が米作りに適しているのかを学んだ。

いよいよ収かくの日、稲刈りの手作業。しゃがんで稲をかまで刈る。と中、足がいたくて、いたくて、社会科の資料集で見た手作業での米作りの様子を思い出した。昔の人の苦労がやってみてよくわかった。

自分たちが手作業で収かくした米を自分たちの手でひとつひとつおにぎりにした。みんなと作って、みんなと食べたいおにぎりはとてもおいしく感じた。すると、農業科支援員さんや農林事務所の方、おにぎりづくりを手伝ってくださった方、そして米などの食べ物にも感謝の気持ちが大きくなってきた。これからも、自分たちの手で作業することを大切にしたいと思う。

農業科活動を通して考えたこと

第一小学校 五年 小林 真歩

私は農業科活動を通していろいろなことを感じたり、考えたりしました。

五月十四日、田植えではハプニングが次々に起こりました。小林さんから、田植えの仕方を習い、いざ田んぼに入ろうとすると、「虫だ」「気持ち悪い！」と、いろんな声があがりました。私もおそろおそろ入ってみると気持ち悪い感じよくが足にまとわりついてきてせながぞくぞくしました。小林さんに教わった通りに田植えをしていると少しなれてきて、みんなスムーズに作業できました。でも昔の人はもっと広い面積を機械無しでやっているのを知り、とてもびっくりしました。

八月二十七日、イネの様子を見ると、ぐんぐんのびていました。小林さんに、台風の時にはどうするのかと聞くと、くきは太くして、あまり長くしないようにするそうです。私はくきは長ければ長いほど良いと思っていたのでびっくりしました。そして、イネかりが待ち遠しくなってきました。

九月二十日、とうとうイネかりの日がやってきました。

小林さんからは、「ひとたばをつかんでのこぎりのようにすると切れるよ。」と教えてもらいました。なれてくると楽しかったけれど、小林さんに周りをかりとってもらっていなかったら、時間内に全部はかりとれなかったと思います。昔の人つてすごいな、とまた思いました。

十一月二十五日、収かくしたもち米を松原先生と後藤先生、お家の方が四角いもちにして焼いてくださいました。そして、もち米を作るのに関わってくださいました先生とおもちを食べる会を開きました。おもちは、きなこといそべ焼きにして食べました。おもちはすごくおいしかったです。そして、私たちがやっていないじよ草や消毒など、毎日の仕事をやってくださった小林さんに感謝の気持ちがわいてきました。

私は、このように苦勞して作った食べ物を、これからも感じやして食べていこうと思いました。

がんばって育てたハクサイ

高郷小学校 五年 齋藤 翼

ぼくは、農業科でハクサイ、ネギ、米を育てました。その野菜の中で、特に楽しみにしていた野菜がありました。それがハクサイです。ぼくは、ハクサイを「おいしくなりますように。」と願いをこめながら育てていきました。ぼくは、ハクサイが大好きだからです。ハクサイはいろんな料理にも使えるし、成長が早いところも特ちょうです。ぼくは、学校に来るのが早いので、よく水をあげていました。雨が降った時はやらないでおきました。そして、観察もたくさんしました。観察を続けるうちに、ハクサイは少しずつ少しずつ大きくなっていきました。

収かく感謝祭では、収かくしたハクサイを使いました。ハクサイはほとんどの部分が食べられて、とてもおどろきました。しかも、そのハクサイは五十センチ近くありました。最初は小さな種だったのに、こんなに大きくなったと思った時、ぼくは三か月間があつという間だったなと思いました。そして、収かく感謝祭では、ハクサイがたくさん入ったとん汁を作りました。おいしくできあがるように、みんなでいいねいに作りました。自分たちで育てた野菜が

こんなにおいしくなり、ぼくは料理つてすごく楽しいなあと思いました。

これから料理や農業をたくさん手伝いたいです。おいしい野菜を作りたいとすごく思いました。この今までの出来事は、大人になっても残る大切な思い出になると思います。やっぱり野菜を育てるのは楽しいなと思いました。

おいしく育てたネギ

高郷小学校 五年 須藤 珀

ぼくは、農業科でネギを育てました。ネギは春に種まきをしました。みんなで協力し、たくさん種をまきました。はちには三つずつ種をまきました。一週間後、ネギは少しだけ芽を出していました。においをかぐと、少しだけネギのにおいがしました。みんな、すごいなと言ってにおいをかいでいました。観察すると、ネギの下の方は、すごくきれいで明るい白でした。上の方は、緑色ですごくきれいだと思いました。それから農業科で観察をするたびに、ネギはどんどん大きくなりました。

また、友達のおばあさんからネギの苗をもらい、同時に育てることにしました。友達のおばあさんからもらったネギは、すごく太くてりっぱでした。でも、それに比べてぼくたちのネギは細くて弱々しく見えませんでした。少し心配だったけれど、日を重ねるたびにどんどん太く、大きくなっていききました。その時は、おどろいたし、とてもうれしかったです。そして、大きく育ち、ぬいてみるようになった時、少しきん張したけれど、わくわくしました。ぼくは、友達と二人で、一本ずつぬきました。ぬいてみると、約五十七

センチメートルくらいの大きさでした。すごく大きくなりっぱに育ったぼくたちのネギを見て、こんなに大きくなるんだと、とてもおどろきました。

収穫感謝祭には、どれも大きく育ち、ぼくたちが育てたネギをとんじるにして食べることができました。そこで初めて知ったことがありました。それは、ネギは全部食べられるということです。最初は、青いところは食べられないと思っていました。けれど、全部食べられるということが分かってよかったです。

来年も、いろんな野菜を育てて、食べてみたいと思います。来年の農業科も楽しみです。

米作りで学んだこと

堂島小学校 五年 高久 想乃子

私は、農業科で特に思い出に残ったことが二つあります。一つ目は、イネ刈りです。みんなでかったイネを束ねました。私とかのさんとでやりました。最初は、束ねることも難しいし、すぐにほどこけてしまつて全然束ねられませんでした。でも、農業科支援員の方や先生に束ね方を教えてもらったなら、少しづつなれてきました。束ねるたびに上達してきました。友達や先生に、

「上手だね。」

と言われ、改めてほめられたことをうれしく感じました。

二つ目は、脱こく活動です。堂島小では、とうみと足ぶみ脱こく機を使つて脱こくをします。昔は、この道具を使つて脱こく作業をしていたそうです。とうみは、ごみやわらなどを取りのぞきます。「の」の字で回しながら分けます。ずっと回してつかれてしまいました。足ぶみ脱こく機は、イネから米を取る道具です。足ぶみ脱こく機では、すぐにほをいれないで、ほの先からゆっくり米を取るというコツを教えてくださいました。私は、足ぶみをするのが重くてなかなか回すことができませんでした。でも、どんど

んなれてきて上手に回せるようになりました。終わった時、足がくすぐつたくて、じわじわとしびれてきました。

種まきから、田植え、除草、イネ刈り、脱こく、と米づくりはとても大変でした。昔の人はとても苦勞をして米を作っていたことがよくわかりました。そして、大変だけれど大切に米作りをしていたんだなあと思いました。これからも、感謝の気持ちを忘れずにご飯をいただきたいと思ひます。

米作りで感じたこと

堂島小学校 五年 佐藤 蓮

ぼくにとって今年は何回目の米作りでした。種まき、田植え、除草、稲刈り、脱こくまでみんなで協力しながら作業しました。特に心に残ったのは、除草と脱こく作業です。まず、除草についてです。除草には、「ころばし」という道具を使いました。意外と簡単にできました。しかし、だんだん、ぼくの班の「ころばし」にだけ土がたまって動かなくなってしまうました。そうになると、転がす度に土をとらなくてはいけないので大変でした。でも、そんな作業もがんばって、下級生に教えながら楽しくできました。

次は、脱こく作業についてです。「とうみ」や「足ぶみ脱こく機」は、ずっと足ぶみしなければならぬので、とても疲れました。「疲れるなあ。」とぼんやりしていたら、**ほを持つ手**が引つ張られて危ない思いをしました。昔の人は、足ぶみをしながら集中してほをもっていないといけなから大変だっただろうなと思いました。そして、脱こくをした後には、まだほに残っている**米**を一つぶ一つぶ手で取りました。大変だったけれど、クラスの友達といっしょにがんばりました。

「こんなにやっていたら、熱中症になっちゃうよ。」

とぼくが言ったら、友達が、

「そうだね。昔の人って大変だったよね。」

と言っていました。

ぼくは、昔の人がこんなに大変な思いをして米づくりをしていたことを実感しました。そして、米一つぶのありがたさを感じました。

ぼくは、来年には六年生になり、最後の米づくりになってしまうので、自分から進んで大変なことも挑戦したいなと思います。そして、下級生のお手本になれるようにしたいです。

アオマメとラツカセイが育つまで

松山小学校 五年 下妻 倅翔

ぼくたちは、この一年間で、アオマメとラツカセイを育ててきました。

五月ごろに、種をまきました。種と種の間はだいたい五センチメートルの間かくぐらいで植えました。一つの穴に、二つの種を入れました。なぜ、二つ入れるのか手伝いに來てくださった支援員の方に聞いてみると、

「一つだとひとりぼっちでライバルがないからゆっくり成長するけど、二つだと互いに競いながら成長するから一つ入れるより二つ入れる方がいい。」

と、支援員の方が教えてくれました。

種を植えてからは、草むしりなどをしました。一回目の草むしりに行くと、ほとんどのアオマメから芽が出ていました。少し成長したアオマメを見たらなんだかとてもうれしかったです。二回目の草むしりに行くと、前よりもぐんとおびていて、ところどころに小さい実ができていました。草むしりをして二週間ぐらいたった時に、と中の様子をタブレットで記録し観察日記を書きました。実の大きさや葉っぱの大きさ、形、感しよくなどを写真とともにまとめま

した。その後もアオマメとラツカセイの草むしりなどを月に二回ほど行いました。そして、十一月に念願の収かくをしました。五年生全員で協力してアオマメをぬきました。

根っこがとても固く、ぼくは力が弱いので二人でがんばってひっぱり、ようやく抜けました、その後も、みんなががんばってアオマメをすべて収かくしました。抜いたアオマメはかんそうさせました。かんそうさせたアオマメは二月にある節分集会で鬼を倒すための豆として全校生で使います。これからラツカセイを収かくし、そのラツカセイを調理するので楽しみです。

今年の農業科の学習を通して、何かを作る大変さや、作物を大切にすることが分かりました。来年も作物を育てるのでとても楽しみです。

いただきますにこめられた意味

姥堂小学校 六年 渡部 天斗

「大変だったけど、楽しかった」

こんな一言が、イネかりが終わると同時にあふれた。

十月四日に五・六年生で行ったイネかり。五月半ばに植えた苗は大きく育っていた。たくさん実をつけたイネは、あざやかな黄色にかがやいていた。まるで太陽のようでもぶしかった。去年は台風のえいきようでイネがたおれ、イネかりができなかったため、ドキドキしていた。初めてのイネかり。ぼくにとって今年のイネかりは、初めての連続だった。

そして、イネをすべてかり終えた。次はかったイネをコンバインに運ぶ作業が待っていた。イネをまとめて持つと、思っていた以上に重かった。でも、友達と声をかけ合うことで、心が軽くなり、楽しく作業をすることができた。改めて、農家の方の大変な気持ちを理解することができた。いつも何気なく食べているご飯は、だれかが苦勞して作っていることを知った。そして、食べ物のありがたみを学んだ。

また、畑での作業には慣れていたものの、大変なこと

多かった。でも、苦勞したことで農家の方の気持ちを味わえた。「おいしく食べてほしい。」という思いを知り、食べものは大切にしようと考えてることができた。

ぼくは、三年生からの四年間を通して、「いただきます。」や「ごちそうさま。」という一日に何度も使う言葉の大切さを学んだ。

「いただきます。」にこめられた意味。それは、食べものを作っている人たちへの感謝だけではなく、大地や自然のめぐみに対しての感謝も込められていると思う。それをふまえた上で、何気なく言うのではなく、作っている人、大地や自然のめぐみに感謝する心を持って言うてほしい。ぼくは、これから、「いただきます。」という一言は、人や自然に対しての感謝の意味をこめて言いたいと思う。

米作りの厳しさ

駒形小学校 六年 邊見 輝來

ぼくは、二回目の米作りをして、去年よりできるようになったことがたくさんありました。

ぼくが去年と比べて今年できるようになったところは、稲刈りの時に稲の束を上手に結ぶことができたことです。

去年は、上手く結べず、稲の束がほじめてしまったことがあります。だから、今年は家で稲の結び方をおじいちゃんから学びました。おじいちゃんは、稲の結び方を分かりやすく教えてくれました。おじいちゃんが教えてくれたことや、去年の失敗を成功に活かすことができました。去年は稲結びが下手だったことに対して、今年は上手く稲結びをすることができました。

稲刈りをした日から、二週間後、去年の米づくりでは経験しなかった予想もつかなかった出来事が起こりました。稲刈りの後、結んで干していた稲の束が強い風で吹き飛ばされてしまったことです。ある日、強い風が吹いたことがあります。学校の田んぼで何かあったのだと、学校から「六年生は明日、長ぐつを持ってきてください。」というメールで予想がつかしました。田んぼに行ってみると、稲

がたおれていました。六年生のみんなは「風で飛んじやつたんだな。」「何これ?」とおどろいている人がいました。ぼくたちは、吹き飛んであちらこちらに散らばった稲を拾い集め、結び直しました。そして、稲を元にもどすことができました。

今年の農業科は、二回目だったから、上手くできたことや初めての経験をして少しずつ米づくりの大変さがわかるようになりました。今までの農業科で学んできたことは、家でじいちゃんとはあちゃんが農業をしているので、米作りの手伝いをするときに役立つと思います。じいちゃんの田んぼは機械で作業をしますが、自然との戦いということには変わらないと思います。だから、じいちゃんの作る米をおいしく味わって食べたいと思います。

育て、ダイズ

塩川小学校 六年 山口 詩乃

三年生でカボチャ、四年生でサツマイモ、五年生でお米、六年生で育てるのはダイズかぁ。私は最初、ダイズに興味を持ってませんでした。見た目が地味だからおいしくはないんじゃない？そう思っていました。

さっそくダイズについて調べることになりました。ダイズから作られる食べ物は、私が思っていたよりも意外とありました。みそ、豆ふ、きなこ……。どれも興味のあるものばかりで、最初にダイズへ不満を持ってしまったことが申しわけなくなってきました。

ダイズはまず、ポットに種をまいて、ある程度大きくなったら畑に移す……。はずですが、私のポットは何週間たっても変化なしです。友達のだいずがどんどん芽を出していく中、私のダイズはいつまでたっても芽が出ず、少しくやしかったけど、先生のダイズをもらいました。自然はなかなか思い通りにはなりません。

みんなのだいずがだいたい十五センチくらいになったころ、畑に植え替えます。

「本当にあんまり水をあげなくていいのかな。」

パソコンで調べてみると、畑にダイズを植えたら自然の雨だけで十分と書いてあったけど、私はどうも心配でした。畑にマルチをしき、マルチに穴を空けてダイズを植えようと思いました。そうしたら、予想通りゲジゲジが出てきました。気持ち悪かったけど、農家の人はこんなのは平気。虫に負けない農家の人の姿を想像しながら、ていねいにダイズを植えました。

ダイズはぐんぐん順調に育っていき、いつのまに十五センチから三十センチ以上になっていました。実もなった一ヶ月後には、からからのダイズになりました。収穫するとき、ダイズのくきがちくちくして苦労したけど、なんとかほとんどのダイズの中身を取り出しました。

ダイズを育てられたのは、畑を貸してくれた方や、協力できた友達、指導してくれた先生たちのおかげです。こんなにうれしいのは暑さ、風、雨などの自然に負けずダイズが育ってくれたからです。感謝していただきます！

大切な作物

関柴小学校 六年 渡部 日菜

私は学校の活動でお米を育てました。農家の人達がお米作りの手伝いに来てくれました。

最初の作業は田植えです。大きくわのような物で土に線を引きました。私は気になったので家で調べてみると、その道具は線引きという道具でしたが、馬鋤（まぐわ）という道具も知りました。昔の人は、機械がなかったのです。馬や牛に馬鋤を引かせて効率よく作業をしていたそうです。そんな伝統がある道具を知ることができてよかったです。

「植える数は三本だよ。」

と農業科支援員の人説明していて、話を聞くと栄養がとられてしまつて、しっかり育たなくなつてしまうからでした。私は、この決まりを守りながら頑張つて植えました。おいしいお米を作るには、決められたことをしっかり守ると良いことがわかりました。畑で野菜を育てているばあちゃんに教えてあげたいと思いました。

時々、苗を見に行きました。紙に、色やにおいなど詳しく書き記録しました。そして、皆でイネになるのを、ゆっくり待ちました。

秋になり念願の稲刈りの時期になりました。田んぼを見渡すと、きれいな黄金色にそまっていました。久しぶりに会った農業科支援員の人たちに、カマの使い方や刈る時のコツなど、分かりやすく教えてもらいました。去年もやったので、刈るスピードがはやくなっていました。軍手をしないでさわると稲が手に当たり、チクツとしました。稲を刈るときの一番の楽しみは音です。きれいに刈れるとサクッと軽い音がなつて、聞いていると楽しくなります。最後にコンバイインに稲を入れて終了しました。皆、頑張つて作業したので、汗でいっぱいでした。私は、こんなに大変な手作業を昔の人はやっていたのだなと思ひ、とてもおどろきました。

このイネ刈りで学んだことは、私達が食べている作物は農家の人が苦勞して作ってくれた大切な食べ物だということです。ご飯を食べる時は、感謝の気持ち忘れずに食べたいです。

農業科支援員さんとのつながり

第三小学校 六年 小林 稜空

「いただきます。」

しゅうかく祭の時、みんなであいさつをし、自分たちで作った野菜を食べました。その時、みんなが、「おいしい。」

と言つて、笑顔で食べていました。その姿を見て、一生けん命、野菜を育ててよかったと思いました。自分たちが作った野菜の中で一番印象に残っているのは、ニンジンです。それは、初めて自分たちで育て、収穫したからです。

夏休みに入る前、ぼくは、ニンジンの種をまきました。ニンジンの種は、ごまつぶほどの大きさでも小さかったので、落とさないようにそつとそつと畑にまきました。ぼくは、こんなに小さな種からニンジンができることを知つておどろきました。夏休みが終わり、畑に行つてみると、とても大きく成長しているのを見てうれしく思いました。ニンジンには、芽が出るまでに水をたくさんあげなければなりません。だけど、ぼくは、ほとんど水やりに行かなかつたので、農業科支援員さんのみなさんが、一生けん命やってくれていたのだと思うと、感謝の気持ちでいっぱいにな

りました。そのようないろいろな人のつながりがあつたらこそ、しゅうかく祭でのみんなの笑顔が見られたのだと思えました。それと、野菜を育てる大変さを学びました。

これからは、野菜を作ってくれる人がいるということも忘れずに、食べ物を残さないで食べたいと思います。そして、「いただきます。」「ごちそうさま。」という言葉をお大切にしていきたいと思いました。

人と自然と農業と

第二小学校 六年 藤井 智華

「はやくおいしいサツマイモを食べたいな。」

私達は今年の六月の初めに、サツマイモの苗を植えました。深さ十センチメートルくらいの穴を掘り、秋に大きなサツマイモができることを願い、ていねいに土をかぶせました。土を掘っている途中、ミミズが出てくることもありましたが、私は、ミミズが苦手で逃げ回っていました。

「ミミズもおいしいサツマイモをつくるには、必要な生き物なんだよ。」

と支援員さんに教えてもらい、ミミズにありがとうと言いたくなりました。一・二年生の時にサツマイモを育てていた私達は、ほくほくしたおいしいサツマイモを食べるのが待ち遠しくてたまりませんでした。みんなが支援員さんのお話を静かに聞き、楽しみな様子で植えていました。

サツマイモの苗を植えた日から五ヶ月程たち、私達はサツマイモを収穫することになりました。長ぐつをはき、軍手をつけて、わくわくしながら畑に向かいました。しかし、収穫できたサツマイモは小さなものばかりで、十個ほどしかありませんでした。それでも、大きなサツマイモもあり

ました。虫に食べられていた部分もありましたが、その一つのサツマイモだけでも大きく育ってくれていて、少しほっとしました。でも、「もつと水をあげていたら、もつとちゃんと草むしりをしていたら。」と後悔することもありました。

「サツマイモを探すのに苦労したということは、サツマイモも大きくなるのに苦労したんだよね。」

先生は、収穫後、こう話していました。私は先生の話を聞いて、これから生き物を育てるときには、育てるものの気持ちを考えて、大切に育てるようにしたいと思います。

私は、六年間農業科を勉強し、作物を育てることの大変さ、農業と生き物の関わりを知りました。そして、自然と人が関わり合って、農業が成り立っていることを実感しました。

農業科を通して感じたこと

高郷小学校 六年 長沼 凜果

私は、農業科を通して感じたことが二つあります。一つ目は、野菜が元気に育つ喜びです。二つ目は、本当においしい野菜を作るにはとても時間がかかるし、大変だということでした。

私の家には、農家のような大きな畑はありません。だから、学校の畑でたくさん野菜を育てるのは、すごく楽しくてうれしいと思います。特に、種をまく時、芽が出た時です。でも、何より収穫する時が、一番喜びと楽しさがこみあがってきます。

でも、「野菜を育てる。」というのは大変だと感じました。ちゃんと育つように水やりをしたり、大きい野菜を作るためにまびきをしたりしないといけません。一度だけ家で、「ここに自分が育てたいものを植えて自分で育ててね。」

と、私だけで野菜を育てることになりました。私は、学校でも育てたミニトマトを植えて次にキュウリ、小さいレタスを植えました。最初のうちは水やりなどのお世話を毎日かさざずやっていたけど、どんどんお世話をする回数が減ってきた時、

「久しぶりにいってみよう。」

と思っ行ってみるとミニトマト三本中一本、キュウリ四本中二本がかれていて、小さいレタスは雑草なのかレタスなのかわからなくなっていました。その後、毎日欠かさず、お世話をしたミニトマト四十八個、キュウリ二十七本、レタス九玉収穫できました。このことがあってから、野菜を育てる時は、お世話をしっかりしようと思いました。

野菜は、喜びと人の苦労がおぎない合ってこそおいしくできると、私は農業科や家での経験を通して感じました。これからも食べ物をむだにしないようにしたいです。

最後の農業科活動

豊川小学校 六年 折笠 凜

調理実習で炊きあがった熱々のごはんを、私達はおむすびにして食べました。お米はもっちりとして甘く、とても美味しかったです。

学校の農業科で体験した米作りで、今年も美味しいお米を作ることができたと思います。種まきや田植え、かかしづくりや稲刈りといった過程を通して、私達は手間をかけてあげる事、協力して作業を行う事の大切さを学びました。

私の家は農家です。以前は、お米も作ってましたが、現在は他の農家の人をお願いして、野菜だけ作っています。農作業用機械がなかった頃の田植えや稲刈りの時は、家族の他に手伝いの人をやとって作業していたと祖母から聞いたことがあります。

学校での作業の時も、先生方、指導員の方、同級生や下級生と一緒に力を合わせて行ったのですが、とても作業が大変でくたびれてしまった時がありました。そう考えると農家の方は毎日、毎年大変な思いをして、お米や野菜を作っているのだなと頭が下がる思いです。

お米や野菜づくりでは、土作りや日当たり、水やりが大

事だと教わりました。でも、農家の方がおいしく育てほしいと願いながら、草を抜いたり、虫を取ったり、土にかけたたりする手間もとても大切だと思います。

祖父母も暑い日も寒い日も畑に出ていき、野菜の世話をしています。キュウリやトマトやサツマイモなど、祖父母の畑から採れた野菜が私は大好きです。

これからは農業科で体験したことが活かせるように、祖父母や父と一緒に農作業を手伝い、おいしい野菜づくりを楽しんでいきたいです。

協力してできた農業科

山都小学校 六年 山崎 茉奈

今年は、スイカとサトイモを育てました。最初にスイカを植えました。スイカは紅宝玉という品種でした。スイカにも、いろいろな名前があるんだなあと思いました。スイカ以外にも、野菜などに種類があるのかなと考えました。

次は、サトイモを植えました。サトイモはスイカを植える時とちがって、上のほうに黄緑色の芽のようなものが出ていると気づきました。なぜ、まだ植えてもいないのに芽のようなものがあるんだろうと考えました。私は植える時は芽がないのがふううだと思っていたけれど、サトイモは芽のようなものがくつついていたので、とても不思議に思いました。

だんだん大きく育っていくと、今度は除草をしました。前まで生えていなかった草がたくさん生えていて、びっくりしました。友達が、

「がんばろうね。」

と言ってくれたので、いつもよりたくさん草をむしりました。その後、わらしきをやりました。作業は大変だったけれど、自分から進んでお手伝いのできたのでよかったです。

スイカのことについて支援員さんが、

「スイカには、親づると子づると孫づるがあるんだよ。」と、教えてくれました。そのことを初めて知ってなるほどと思いました。とれたスイカは、くさったりして少ししか食べられなかったけれど、みんなで協力して作ったのでよかったです。それに友達が、

「甘くておいしいスイカが作れたから、がんばってよかったですね。」

と言ってくれたので、うれしかったです。

農家の人たちは、暑い中、私たちのためにお米や野菜などを作ってくれていると思うと、感謝して食べないといけないと思ったし、きらいでもできるだけ残さずに大切に食べようと思いました。

令和3年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【特別審査員】

関東学院大学理工学部 教授
喜多方市教育委員会 教育長

(敬称略)

佐藤 幸也
大場 健哉

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長
喜多方市PTA連絡協議会長(高郷小学校PTA会長)
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所 経営支援課長
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主任主査
会津よつば農業協同組合喜多方営農経済センター 営農振興課長
喜多方市小学校農業科支援員
喜多方市農業委員会委員
喜多方市産業部農業振興課長

飯野 淳
小林 茂行
長谷川 優子
小林 智之
和田 清政
山田 義人
木戸 賢治
都倉 浩二

【事務局】

喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事
喜多方市教育委員会学校教育課 農業科活動推進員

齋藤 勝芳
笹川 光威
安藤 美咲

編集後記

今年度も、農業科担当として、放射線測定や、各学校での活動の様子を撮影させていただきました。ほとんどの学校で田植えや稲刈り、収穫祭などを実施できてとてもうれしかったという声を撮影に行った際に聞くことができ、私まで嬉しくなりました。

作文コンクールからも、農業科を通して家族や地域との関わりが増えたという内容の作文が多いと感じました。児童の喜びの声を聞くことができることも、作文コンクールで素直な気持ちを表現できるのも、支えてくださる農業科支援員さんのおかげです。児童が感謝の気持ちと、学習する意欲が高まったと同時に、農業の素晴らしさに改めて気づくことができた作文コンクールになりました。

(農業科活動推進員 安藤 美咲)

農業科の学習をとおして、児童それぞれにとって様々な気づきや成長が感じられる作品ばかりでした。作物や命、そして関わった人間に対する感謝の気持ち、実際に体験した事による気づきから、新たな学びへつながる興味関心など、教室での学習だけでは得ることができないかけがえのないものが、みずみずしい言葉で綴られていたことに感動しました。今後も、農業科をとおして、児童の豊かな心の育成、社会性の育成、主体性の育成に取り組んで参ります。

(学校教育課 課長補佐・指導主事 笹川 光威)

喜多方市の農業科が始まり15年目を迎えました。これまでに、本市農業科が受賞したコンクール内容や、新聞、雑誌等の取材記事を改めて読みますと、「直接体験」がキーワードであることがわかります。インターネットを用いて多くの情報を得ることができる現在は、「知ったつもり」になっている時代と言えるのかもしれませんが。そのような中、本市農業科が重視する「直接体験」の重要さは、今後、益々高まっていくことでしょう。改めて、農業科を支えてくださる皆様へ感謝申し上げます。

(学校教育課 課長補佐・指導主事 齋藤 勝芳)

令和3年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

令和4年3月 発行

喜多方市教育委員会

